

---

---

# コロナ禍下の手話話者に起きたこと

市田泰弘(手話言語学・手話通訳養成)

---

---

# 「手話話者」の多様性

- 手話言語の母語話者 (デフファミリー、ろう学校)
  - ろう者の家庭 (デフファミリー) 出身のろう児は、家庭で手話言語を母語として習得する
    - その割合は、ろう児全体の10%程度
  - 聴者の家庭に生まれたろう児は、一般的にはろう学校の児童集団の中で手話言語を習得する (ろう学校では手話言語が公式には認められていない場合が多い)
    - インクルージョンの一般化で、ろう学校の児童生徒は昭和30年代をピークに半減
- 手話言語の後期学習者 (高校～、大学～、中途失聴)
  - 高校～: 受験をきっかけにろう学校へ
  - 大学～: 授業のあり方や人間関係が多様になり、「手話」の必要性に目覚める
- いわゆる「音声語対応手話」ユーザー (上層言語寄りのピジンに類似)
  - 後期学習者の中には、母語である日本語の「視覚化」のみを求めるニーズがある

## 少数言語話者のバイリンガルと手話特有の問題

- 第二言語として公用語を習得する際の「程度」の問題
  - バイリンガルであっても、少数言語話者の母語の使用が保障されることの意味
- 公用語のやりとりが、音声では機能しないという問題
  - 文字でのやりとりはできても、対面場面での音声によるやりとりができない
  - 聴覚活用がかなりできる場合でも、環境によっては機能しない
- 「音声語対応手話」の限界
  - 長時間の、複雑なやりとりには不向き(自然言語が本来備えている性質のいくつかを欠いている)

## 「情報障害者」としての「聴覚障害者」

- 少数言語話者としての社会的不利(母語が非公用語であること)
  - 言語コミュニティ内においては、「障害」はどこにもない
- 手話言語も日本語も母語として機能しないケース(ダブルリミテッド)
  - 理想的な情報提供がされても、情報から取り残される可能性
- 音声に偏った情報のやりとり
  - かつて「電話ができないこと」は、社会参加において「致命的」だった
  - 映像化(動画)、文字化(字幕)、音声認識(筆談の自動化)等、技術の進歩によって、劇的に改善されつつある

# 「IT時代」における手話話者の位置

- IT時代における「文字情報」の復権
  - インターネットの普及
  - 携帯電話の「文字メッセージ」の普及
  - テレビ放送における「字幕が当たり前」の時代の到来 ⇒インターネットでも
- IT時代における「映像重視」の一般化
  - インターネットにおける動画共有サービスの一般化(ニコニコ動画、YouTube等)
  - 携帯電話における「ビデオ通話」の一般化
  - 「動画が当たり前」の時代の到来 + 「字幕も当たり前」 ※字幕がなければバズらない
- IT時代を先取りする手話話者という観点の登場

## 東日本大震災における「手話話者による情報発信」

- 2011/3/13 15:00 首相官邸記者会見に手話通訳がつく
- Twitter上の「#syuwa\_yobo」に反応した人々
  - 手話話者のニーズが満たされない
    - 質的問題：手話言語(日本手話)による情報提供が保障されない
    - 量的問題：絶対量が不足。手話通訳の姿が画面から消えることも
  - 放送サークル「ニコ生企画放送局」がボランティアを募集
  - ニコニコ動画「震災ニュース日本手話放送」(2011/3/16～、10時～19時、2週間)
  - Ustreamスタジオ「NIHONBASHI CAFEST」が機材・スタジオを無償提供
- 手話話者有志がYouTubeで発信開始
  - 「デフ・ニュース・ネットワーク(DNN)」(2011/3/14～2014/5/30)



## コロナ禍下の手話話者に起きたこと

- Zoom等の普及期における手話話者の動き(周囲の誰よりも速かった)
- 動画の品質は手話のやりとりに耐えられるか
  - ソフトの品質改善の動きも速かった(ソフトとしては実用上問題ないレベルが実現)
  - ろう者はバーチャル背景を好まない(手が背景扱いされる問題は未解決)
- 話者交替における問題
  - スピーカーを音声によって認識する機能は利用できない
  - 手話言語の話者交替のマーカである「視線」が機能しない問題
- 手話話者の「都市伝説」
  - Zoomのマルチスポットライト、マルチピン機能の追加は、スピーカーと手話通訳の画面を固定したいという手話話者のニーズに応えたもの？